静かな夜に『静夜思』を思う

秦　　耕　司

『静夜思』　　李白

牀前看月光　　牀前月光を看る
疑是地上霜　　疑うらくは是れ地上の霜かと
挙頭望山月　　頭を挙げて山月を望み
低頭思故郷　　頭を低れて故郷を思う

ある静かな月夜のことであった。静かに故郷に思いを致している李白を思い浮かべながら，この五言四行の詩をじっと眺めていると，気のせいかモゾモゾと動くものがある。おや，と思ってそちらに視線を注いで見ていると，その動きは次第次第に大きくなってくる。それは自分がそこに座っていることに何か違和感を覚えているようでもあり，もっと自分の存在価値を認めてほしいと訴えているようでもある。そして一つそのような動きに気がついてみると，あそこからもここからも，次々と同じような動きが始まって，みるみる静寂な夜を破り，ひと騒動起こりそうな空気さえ……やがて，それぞれが十分に自己主張を終え，お互いがお互いの存在意義を認め合い，改めて自分自身の役割を確認し終えると，何事もなかったかのように，再び元のところに納まって，物思いにふける一人の老人を，そっとやさしく包むのであった。

なぜだろうか。なんなのだろうか。くり返しこの詩を眺めていると，い

つの間にか視線の流れは“霜”の上で立ち止まるようになっていた。なぜこの詩に“霜”が使われているのだろうか。一体“霜”は何を意味しているのだろうか。月光があまりにも白いので霜ではないかと思ったのだ。そんな子供にも解るようなことを問うているのではない。なぜ霜でなければならないのか，ということである。

牀前看月光　　chuáng qián kàn yuè guāng
疑是地上霜　　yí shì dì shàng shuāng

この表現は，それを物語っている。月光を看てそれが霜ではないかと疑った。だから空を見上げて月を望み，故郷を思ったのである。単に霜のような白い月光を眼にして月を見たのではない。だからこの“霜”は，月光の白さを形容しているだけではない。詩の中において，何らかの意味づけがなされていると見なさなければならないのである。でなければ“霜”一字が浮いて，あまり意味のない存在となってしまう。

視線を後半に移してみよう。

挙頭望山月　　jǔ tóu wàng shān yuè
低頭思故郷　　dī tóu xī gùxiāng

対句である。二つの句の同じ位置に，それぞれ“頭”がある。動詞は“挙”と“低”。なかよく並んでいる二つの“頭”は，ゆっくりと上を向きやがて下を向く。あえて人目を引くように並べておかれた二つの“頭”。技巧がつたないのだろうか。そうではない。弘法にも筆のあやまりなのだろうか。いや，ちがう。意識して並べたのである。目立つように。なぜ“頭”を突出させたのだろうか。

頭を挙げて山月を望み，頭を低れて故郷を思う。その頭を“挙，低”させたのは“霜”であった。両者を結びつけるものは何か。“霜”と“頭”。

この二つの語を並べて見ると，それは意外と明らかであった。「白髪」である。とすれば，この詩は李白晩年の作であるにちがいない。老いた李白が望郷の念をつのらせ，その思いをこの詩に託したのであろうか。それにしても静かである。

この詩には一句と三句に字句の異同がある。冒頭に掲げたのは『唐詩選』に見えるもので，主に日本で流布している。次に掲げるものは『唐詩三百首』に見えるもので，中国ではこちらの方が広く愛唱されている。詩題も『夜思』である。字句の異同は，詩全体の意味内容にどのようなちがいをもたらすのだろうか。比較してみよう。以下冒頭の『静夜思』をA詩，次に掲げる『夜思』をB詩とする。

『夜思』　　李白

牀前明月光	牀前明月の光
疑是地上霜	疑うらくは是れ地上の霜かと
挙頭望明月	頭を挙げて明月を望み
低頭思故郷	頭を低れて故郷を思う

一句と二句の関係がA詩とは全く異なったものとなっている。ふと視線をベッド付近にやると，そこにはコウコウと月光が降り注いでいて，思わず霜ではないかと疑った。おお，今日はなんと明るい月だろう。軽い驚きをもって明月を望み，そして故郷を思ったのである。B詩の場合“霜”はあまり気にならない。月光を眼にした瞬間に霜ではないかと錯覚したから。流れは自然で詩的情緒にあふれている。これに比べると“牀前看月光”はいささか俗っぽく感じられる。望む“月”も，月光をふと霜ではないかと思った背景からすると，“山月”は“山”が少し余計な感じがしないでもない。ここでは“山月”のような具体的な風景は少々目ざわりであろう。“月(明月)”だけがよい。中国でB詩が好まれる所以であろう。

しかしよく考えてみると，ぐうぜん月光を眼にし，まだ直接月を見ていない段階でいきなり“明月光”とするのはどうだろうか。一般的な“月光”ならともかく，“光”として間接的に述べるのに，まだ眼にしていない“月”を既知表現の“明月”で表すのは，いささか唐突の感がしないでもない。それとも“明月＋光”ではなく“明＋月光”なのだろうか。

B詩は“霜”を「白髪」の比喩として用いていないことは明らかであろう。ありふれた自然現象に，ふと自分の老いに気づき驚く。いかにも詩的情緒にあふれている。しかしそうすると，B詩では前半二句と後半二句が，しっくりとかみ合わないのである。ふと眼にした“霜”。その霜がきっかけとなって，自分の老いにハッと気づいたにしては，二つの“頭”は初めから待ち構えていたようで，少々意識的にすぎよう。“霜”と“頭”。B詩では無理に結びつける必要はない。

“疑”はどうだろうか。B詩と比較してみると“疑”はA詩の方が強い。B詩はふと眼に入った月光を霜ではないかと疑ったのである。A詩では月光を看ているうちに，それが霜ではないかと疑い出したのである。B詩が単なる錯覚、見まちがい、思いちがいであるのに対し，A詩は文字通り疑いを抱いたのである。月光であることを承知しているが故の疑い。“霜”に何らかの意味を含ませていると見なす理由はここにある。こじつけではない。両詩を並べてみよう。

牀前看月光，疑是地上霜
牀前明月光，疑是地上霜

A詩では作者が“牀前”にいて月光を看ている。作者の意志が働いている。だから“疑”は，疑いを抱いた意味になる。B詩では“牀前”に降り注いでいる月光を提示したに過ぎぬ。それは意識して看たのではない。眼に入ったのである。だからこちらの“疑”は，錯覚によって一瞬見まちがえた

意味になる。両者のちがいは歴然としている。A詩の，月光を看ていて霜ではないかと疑い出した精神状態は，ゆっくりと上下する二つの“頭”で象徴される，後半のしんみりした情景に，自然にマッチしていよう。“霜”と二つの“頭”。李白は相当意識してこの二語を使っている。静かな動きのない情景の中で，唯一の動きらしい動きは，この白くなった“頭”である。それだけ「老い」を真正面から見つめようとしているのだろう。月光を見てふと老いに気がついたのではない。自分が白髪になっていることはすでに知っている。高齢であることも十分承知している。それを今月光を看ることで強く意識しはじめたのである。月光を“霜”に喩えた理由はここにある。“牀前看月光”では胸中に何か去来するものがうかがえる。そして“疑是地上霜”ではっきりと老いを自覚するのである。つまり，月光を通して自分の老いを凝視しているのである。そう解釈すれば“看月光”という平凡な動詞と名詞の組み合わせと動詞“疑”の持つ意味が，詩句として生きてくるであろう。“看”は，何とはなしに見ることから，何らかの思いや目的を持って見ることまで，その意識の程度においてかなりの幅がある。だから，事実としては，最初は月光がふと眼に入ったのはまちがいない。今までにもいく度となく眼にした月光。しかしその月光にも，今宵はいつもとはちがった何かを感じたのであろう，そのまま視線を移さずにじっと看ていると，だんだんと月光が霜に見えてきて，やがて老いを自覚するようになったのである。あるいはその逆であるかも知れない。月光を看ているうちに，若い時に出たきり一度も帰っていない故郷のこと、故郷の人が思われてきて老いを自覚するようになり，だんだんと月光が霜に見え出してきたのかも知れない。いずれにしろこの“看”は，二句目によって時間的な幅が生じ，時間の経過とともに，意識に変化が芽生えることになった。とすれば，この一句は決して俗っぽいと言うことはできないであろう。日常生活での体験は，日常生活で用いるような語句の組み合わせでしか表現できない，必然性があったのである。

言葉としてはないが，月光を霜ではないかと疑っている時に，李白の胸中には，すでに故郷への思いが生れている。だから“挙頭”し“望山月”したのである。“月”は故郷の人。“山”は故郷の山河であろう。象徴としての“月”。それに“山”を加えることによって，故郷のイメージをより具体化している。それに，これは永遠に変わらぬ自然と年月とともに老いる人間の対比でもある。“明月”とのちがいがここにある。間接的、象徴的に故郷を述べたのが三句。それを言葉の面ではっきりと述べるのが四句——“思故郷”。ここには人も山河もあらゆるものが含まれている。“山”と“月”を望みながらの故郷への思い。その故郷への思いがつのっていっそう強くなり，いちだんと深くなった時には，もはや眼前に横たわる景色は，眼に入らなくなったのである。

低頭——思故郷

この詩は“山”一つで美しいシルエットになっている。季節は秋。“霜”がそれを物語る。ひんやりとした空気。冴えわたる月光。その月の光に照らされて夜空に黒くくっきりと浮かぶ山。水墨画のようなぼかしの入った白黒ではない。あっさりした明暗のはっきりした白黒である。影絵のような。一切の色彩をそぎ落とし，光と影による明暗だけの世界。そこには物音一つしない静けさが広がっている。意外にも，詩的香りの高い“明月”よりも，そうでない“山月”の方が，情景描写のイメージ造りがすぐれていたのであった。

ありふれた語彙を使い，口語体を基調とした，誰にも解る平易な表現。ところが，そんな身近な常用語、常用表現にも，実は周到に用意された意図があった。俗っぽそうな表現でありながら，俗っぽさを感じさせない所以であろう。むだがない。詩句と詩句とが有機的に結ばれていて，言葉の流れには，むしろ簡素で平易な中にも，静かな緊張感すらある。五言の四行詩という，詩の形式としては最も短く，語彙数も最も少ない詩には，ど

んなにありふれた簡単な語彙、語句にも，そこには詩人の思いが託されていて，一字一句ゆるがせにできないばかりか，字句間にも行間にも作者の意図するところがすき間なく張りめぐらされている。

この詩にはベッドがある。外は何もない。テーブルもない，酒もない，友もない，琴も笛もない。動きらしい動きもない。物も色彩も音も動きもない世界。そんな中にベッドが一つ。詩の冒頭にいきなり持ってきて，李白の眼の前においてある。山月を望み故郷を思う詩に，なぜベッドがあるのだろうか。しかもベッドだけが。考えてみればどこか引っかかるものがある。

そう言えば“地上”も不可解である。霜が地面に降るのは常識である。それをなぜことさら“地上霜”と形容したのだろうか。「空の雲」とか「夜空の星」と同じ表現法であろうか。いや，遠く見上げる空とちがって，足下の“地上”にはそんな詩的な香りはない。本詩を眺めていると“地上”だけが余計なものに見えるのである。わざわざ言うまでもないことを，二字分の穴埋めをするためにとって付けているかのように。

“地上霜”という修飾関係は何を意味しているのだろうか。霜は地面に降るから，一種の属性関係として“地上”としたのだろうか。否。それでは“地上”に積極的な意味は付与されない。“霜”に自然現象としての霜以上の意味が含ませてある以上は，それを限定している“地上”にも，それ相応の意味を含ませてあると見るべきであろう。でなければ，本詩において“地上”だけが，中味のない色あせた存在となってしまう。

“地上”は場所を表す語である。と言うことは，“霜”と疑われる月光が照らしている場所，それを“地上”と比喩したのかも知れない。とすれば“霜”だけではなく，その場所にも意味があることになる。“地上霜”と疑った“月光”。それはどこを照らしている月光だろうか。李白は“牀前”にいる。月光が照らしているのは床とベッド。“地上”とあるから床ではない。“地上”には床の意味もあるから，それでは当り前にすぎよう。第一，

李白は床に立っている。それに李白はベッドのすぐ前にいるから，視線は極端にうつむく方向になる床には向いていない。そこには演劇がはじまる直前に位置と姿勢を決め，幕が開くのを待っているような，型にはまった不自然さがあるから。それに，それではこの詩を“牀前”ではじめる意味がなくなってしまう。残るはベッド。李白のいる位置からすれば，“牀前看月光”という表現からして，ベッドがいちばん自然である。B詩と比較すると，それがよく解る。

牀前看月光

“牀前”は場所詞である。李白はベッドの手前にいて月光を看ている。ベッドの大きさからすれば，“牀前”という言い方はベッドのすぐ手前になる。そんなに離れてはいない。李白はベッドと向かい合う形で月光を看ているのである。とすれば，李白が看ている月光は，自ずとベッドを照らしている月光になるであろう。このように見れば“牀前”を李白が月光を看ている場所として，文頭に用いた意味，特に“牀”を用いた意味が明白になる。でなければ月光を看ている場所が“牀”の前である意味を見出すことはできず，ぐうぜん性から一歩も出ないことになる。ベッドは月光に照らされて，うす暗い周囲から浮かび上がっている。ベッドに焦点が当ててある。

牀前明月光

“牀前”と“明月光”は修飾関係にある。“明月光”は“牀前”を照らしている。つまりベッドの手前である。他に家具がなければ床しかない。詩句にも“地上霜”とある。李白はある程度ベッドから離れたところにいる。月光を眼にしたのはぐうぜんであるから，月光が照らしている場所もたまたま“牀前”であるにすぎない。しかも“牀前”と言った後で“地上”と言い換える意味は何か。それは“牀前”が“地上”であることを明確にしただけである。ぐうぜん眼にした光景をもとに詠んだ見景生情の詩であるから，“牀前”も“地上”

も文字通りその場所を指しているだけで，特別な意味はない。視線もベッドには向いていない。

そう，李白はベッドに降り注いでいる月光を看て老いを意識したのである。単に月光を看て思ったのではない。やはりベッドは重要な役割を担っていたのである。

ベッド・地面――月光・霜――白髪・老い

もっと簡単にしよう。

ベッド――老い
地　面――老い

まさか……

整理してみよう。

牀前看月光

ベッドを照らす月光を看ているうちに，胸中に何か去来するものを感じる。

疑是地上霜

月光が霜に見え，ベッドが地面と思われ出し，初めて強く老いを意識する。

挙頭望山月

若いころに歩きまわった山河は昔のままにちがいない。懐かしい人はもう老齢であろう。

低頭思故郷

故郷に強い思いを馳せていると，眼前の景色は次第に消え，瞼に浮

かぶのも，脳裏を占めるのも故郷一色であった。

起句にはすでに承句の要素を含んでおり，承句には転句の要因を宿している。転句から結句への流れは，並立句と言えるほどに平凡でありながら，文字通り結句としても，起句から転句までをしっかりと受け止めている。結句としての働きはA詩の方が強いことは明白であろう。それは，起句から転句までに含まれる，内容の深さからくるちがいである。日常の語句を用いた平易な表現でありながら，あじわい深い内容をたたえた詩句構成は，晩年の作品にふさわしく，枯淡の域に達した底のかたい詩編と言うことができよう。

このように，老いの認識からはじまって故郷への思いに至る，心情の推移（深化）を詠ったわずか5字×4行の詩は，四句全てに動詞が出てくるが，そこにある六つの動詞“看、疑、挙、望、低、思”の動作主体（主語）はいずれも李白である。この詩は，終始一貫して李白が一人称となった，李白主体の詩である。それだけ老いに対する意識と，老いとの関連での故郷への思いが強く出された詩であると言えよう。ところが一人称としての李白，主語としての李白は，言葉としてはまったく表面に出ていない。李白はすがたの見えない影としてシルエットの中にいる。後ろ姿として。それがいっそう静けさを増している。それは自然の静けさだけではない。李白の心の静けさも映し出されている静けさである。強い思いは，強ければ強いほど，その主体が見えないだけに，色彩や動きがないだけに，それだけに深く淵の底に沈むような，静かな思いであった。

この詩を作った時に李白が死期を悟っていたかは不明である。おそらくまだであろう。初めて老いを意識しただけで，その気配を感じることはできない。ただベッドに焦点を当て，ベッドを地面に喩えているところから見れば，死について何らかの思いがあるのを否定することもできぬ。

ベッド――地面――老いの自覚――故郷への思い

という図式を考えると，この詩には，単なる老いの自覚とか，望郷以上の何かが感じられるであろう。これまで奔放に生きてきた李白，喜怒哀楽の大きな李白にしては，別人のように神妙なのも気になるところである。死への思い。それは生への憶いからはじまる。思うままに生きてきた自分ではあったが，はたして自分の人生はなんだったのだろうか。十分に納得のできる人生だったのだろうか。このまま朽ち果ててしまうことへの空しさ。自分の人生に先が見えたのかも知れない。もしかすると李白は，近ごろ自分の身体や精神状態に，何か変化が起こっているのに気づきはじめていたのではないか。それをはっきりと自覚させるきっかけとなったのが，ベッドに降り注ぐ“月（故郷の人）”の“光（老いた面影）”であった。季節はあたかも秋である。

このように見てくると，B詩は，細かに見れば，言葉の用い方に瑕瑾とも言えなくもない，わずかばかりの必然性に弱いところがあるが，ありふれた自然現象に，ある時ふと起こった故郷への思いを表出した，詩的情緒にあふれた佳詩であると言えようし，A詩は，一見俗っぽいとも思われる表現でありながら，身近かな自然現象に触発されて，自己の精神状態をいちだんと深めた，底光りのする詩であると言えよう。A、B二編の詩は，詩題における“静”一字の有無によって，心情の深さに大きなちがいをもたらしている。李白は当初B詩を創り，のちに推敲を加えてA詩に書き改めたのだろうか。それともA詩に託された李白の真意をつかみ取ることのできなかった後世の人が，B詩に創り変えたのだろうか。

“静”は，夜が静かなだけでなく，静かな気持で物思いにふけっている李白の心理状態をも暗示している。あるいは，もしかしたら，この詩は，病床にふした（もしくは就寝前か夜中に目が醒めた時）李白が，ベッドの上で半身を起こして，ベッドを照らしている月光を眼にして詠んだ，李白特有の因情見景の詩である可能性もないことはない。一字一句細部に至るまでの心情的な意味づけがそれを否定しない。第一，そのように見ると，場

面設定としての起句に，自然な位置関係よりも知的な構成の方を強く感じる“牀前看月光”という表現や，起句において，場面導入として“牀前”が詩文冒頭に用いられていることが，作詩着想の背景として自然にうなずけるのである。果たしてそうであるとすると，李白がベッドの上に座っていながらも，ベッドと向かいあう形で月光を凝視している表現をとったのは，A詩を解釈する上での重要な要素となる。それは，凝視している対象はベッドでもあるわけで，その場合，上述した筆者の見解を強く補強することになるからである。老いの自覚，故郷への思い。それらはいずれも，月光とベッドのとりあわせが出発点となっている。そのベッドと月光は“地上霜”と比喩されているのである。

ここまで考えれば，ふと月光を眼にした李白が，まずB詩を創り，のちにA詩に改めた可能性は，ほとんどなくなってこよう。とすれば，李白の真意を解しなかった後人が，B詩に書きかえた可能性は，疑いの余地のないほどに確かなものとなってくる。しかしその場合，たとえその後人が李白の真意を汲み取ることができなかったとしても，詩題から“静”をけずり『夜思』と改めていることからもうかがえるように，A詩の改作は，単なるこ手先の字句の取り換えなどではなく，詩全体を見るからに詩的情緒あふれる別の即興詩として新しく創り出したことから，その人は相当にすぐれた語感の持ち主であったことが想像できるのである。実際筆者は，久しくB詩を好んでいたし，A詩をここまで掘り起こすことができたのも，B詩あったればこそである。先人に敬意と感謝の意を捧げつつ筆をおさめることにしよう。

ベッド（“地上”）を照らしている月光（“霜”）を看ているうちに，自分の老いを強く意識するようになった。自分の人生はこのまま終わってしまうのだろうか。自分は後どのくらい生きているのだろうか。これからどうすればよいだろうか。そう思うと，若い時に離れたきり一度も帰っていない故郷のことが，今まで以上に思われてくる。頭を挙げて山月を眺めてい

ると，故郷の山河，親しかった人が“頭”に思い浮かんできて，望郷の念が強くなってくる。そして故郷への思いが強くなるにしたがって眼前の山月は次第次第に霞んできて，やがて瞼にははっきりと故郷の山月が浮かぶのであった。山は若いころよく登った峨眉山。月は……。李白が最後の最後にかぎりなく深く思いを致した人――それは果たして誰だったろうか。

ベッドの前で一人たたずむ老人。空気はひんやりとして肌寒い。月はいよいよ冴え，山はますますくっきりと浮かんで，どこまでも静かな秋の夜長であった。